

序論:現代の迷いとコリント教会の悩み

- 情報過多の時代において、結婚の価値や意味についても迷いが生じている。
- コリント教会の人々も、結婚すべきか、独身でいるべきか迷っていた。
- 本箇所は、この迷いに対するパウロからのアドバイスである。

文脈:結婚と独身に関するパウロの教え

- パウロはコリント教会からの結婚、離婚、男女の交わりについての質問に答えている。
- パウロは結婚を否定せず、むしろ性的誘惑を避けるために勧める場面もあった。
- 重要なのは、結婚しているか否かではなく、「主によって召され救われていること」。
- 前回の箇所では、主に召された状態で生き方を教えていた(割礼、奴隷問題)。
- 本箇所では、未婚、婚約、再婚の問題に焦点を当てている。

大前提:パウロのアドバイスと主からの命令の違い

- 本箇所でパウロが勧めることは、彼の「アドバイス」であり、主からの「律法や命令」ではない(25節)。
- 独身でいること、婚約中のままでいること、再婚しないことを勧めているが、これは参考意見であり、絶対に従うべきものではない。

1. 状況に応じて最善を選ぶ

- **独身を勧める理由:差し迫った危機(26 節)**
 - コリントの教会は性的誘惑や不品行、ユダヤ人や異邦人からの攻撃にさらされていた。
 - 家庭の平安や子どもの成長に心を割くことが難しい状況。
 - 不要な苦難を避けるため、パウロは独身や未婚の選択肢を示した(28 節)。
- **どちらを選んでも罪ではない**
 - 結婚するか否かは、パウロにとって「どっちでもいい」問題。
 - 「妻と結ばれているなら、解こうとしてはいけません」(27 節)。
 - 「結婚すべきだと思うなら、望んでいるとおりにしなさい」(36 節)。
 - 大切なのは、信仰的な理由をもって状況を判断し、決心すること。
- **婚約者への助言(36-38 節)**
 - 当時の社会状況(結婚適齢期、婚約の重み)を踏まえる。
 - 婚約者に対して不適切だと判断するなら、結婚しなさい(36 節)。
 - しかし、誰かに強いられず、自分たちの判断で婚約状態のままでいることを決意するなら、それも立派な振る舞いである(37 節)。
 - 重要なのは、キリスト者として責任をもって信仰的判断をしているかどうか。
- **聖書は自律的な信仰的判断を求める**
 - 命令されることを避け、自分で考えずに誰かの指示に従う方が楽だと感じる人もいる。
 - 聖書は律法だけでなく、私たちが信仰によって状況を判断し、自ら決心することを求める時がある。
 - 人生の選択において、聖書の価値観や基準に従い、信仰的に決心することが求められる。

2. 基準は何か？ - ①この世は一時的なものであるという価値観

- ・「永遠の視点」「終末を見据えた視点」(29-31 節)
- ・「時は短くなっている」:この世の価値観や支配の時間が短くなっている。
- ・この世のものは永遠ではない:物質も朽ち、価値観も変わる。この世の有様は過ぎ去る(31 節)。
- ・復活の時には結婚もない(マルコ 12:25)
- ・結婚やこの世の出来事を人生のすべてと固執すべきではない。
- ・「妻のいる人は妻のいない人のように」:結婚にこだわりすぎない。
- ・「泣いている人は泣いていないかのように、喜んでいる人は喜んでいないかのように」:一時的な感情に支配されない。
- ・「買う人は所有していないかのように」:財産や富にとらわれない。
- ・大切なのは、この世が一時的なものであり、永遠の世界に比べれば取るに足らないという価値観。
- ・私たちはこの世の物事に執着しすぎていないか？
- ・真に大切なのは、主が与えてくださる永遠のいのちであり、永遠に変わることのない主ご自身である。

3. 基準は何か？ - ②【主】に集中できているか

- ・心を一つに集中する(32 節)
- ・「思い煩わない」:心を二つに分けず、分散させない。
- ・キリスト者には、心を一つに集中することが必要。
- ・集中すべきこと:「どうすれば主に喜ばれるか」「どのように【主】に仕えるか」。
- ・ひたすら主に奉仕する(35 節)
- ・パウロは支配のためではなく、教会の人々の「益」のために独身を勧めた。
- ・「ひたすら主に奉仕する」ことは、牧師だけでなく、すべてのキリスト者の恵みであり、益となること。
- ・私たちは、色々なことを心配して心を分散させるのではなく、主に集中し、主に仕えるためにどうすべきかを基準に物事を判断する。
- ・自分の人生の選択が、「いかに【主】に喜んでいただくか」「どのようにして【主】に仕えるか」を基準にしているか吟味する。
- ・特に、忙しい時や苦しい時こそ、主にのみ集中できるように生き方を決めることが、パウロが独身をより良いものとして勧めた理由である。

結論:永遠の視点と主への集中を基準に生きる

- ・現代の私たちも人生の多くの選択に迷う。
- ・パウロは「絶対的な答え」ではなく、二つの大切な基準を教えてくれた。
 1. この世は一時的なものであるという視点:永遠に続く主ご自身と永遠のいのちに目を向ける。
 2. いかにして主に喜ばれ、主に仕えるか:人生のあらゆる決断の根底にこの問いを置く。
- ・パウロが独身を勧めたのは、私たちを束縛するためではなく、心を分散させることなく、ひたすら主への奉仕に集中し、真の益と祝福を得るため。
- ・世の中の価値観や他人の期待ではなく、この二つの基準をもって物事を決断する。
- ・主は私たちを束縛するのではなく、「品位ある生活を送って、ひたすら主に奉仕できるように」導いてくださる。
- ・これから始まる一週間、主に信頼し、主を基準として歩む一週間としよう。